様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ８ 月 ２９ 日現在

機関番号：２４２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０３８５２

研究課題名（和文）地域社会における祭礼・芸能の変容と住民／他出者／外部参加者の関係性に関する研究

研究課題名（英文）Succession and Reconsturuction of Festivals/Folk Performing Arts in Overaged and Depopulated Communities: Focusing on the Role of Mediator between Inhabitants, out-migrants, incomers, and volunteers.

研究代表者
武田　俊輔（Takeda, Shunsuke）

滋賀県立大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：１０３９８３６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域社会における「伝統的」とされる祭礼・民俗芸能とその担い手集団の(再)編成と 背景にある地域社会の戦後から現在にかけての変容について、地方都市・農村・漁村（離島）それぞれについて明らかにする。本研究はさまざまな困難を抱えつつ継承されている祭礼・民俗芸能について、戦後における地域社会の変容と少子高齢化、そうした中での他出者・移住者の参加とそれに伴う変容、 また担い手・他出者・移住者やボランティアなどの外部からの参加者との相互関係を分析する。その上で祭礼・芸能の意味づけの多様性と競合を、居住者・他出者・外部参加者の間のズレに注目しつつ参与観察調査とインタビューを通じて明らかにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義
地方都市や限界集落に関する他出者・移住者を扱った研究は農作業の手伝いや福祉的なサポートといった点には注目して いるものの、地域のアイデンティティの核となる祭礼・芸能に関する関わりを可能にする要因やそこでの他出者にとっての意味まで踏み込んだものは極めて少なく学術的に重要である。また農山漁村の限界集落における住民・他出者・移住者等の関係性と、相互の摩擦やすれ違いのあり方、摩擦を踏まえた上でのそれぞれの共生の可能性、摩擦を仲介する人々とその役割、祭礼や民俗芸能が三者の関係性の構築に持ちうる可能性を本研究は明らかにすることで、地方都市や限界集落の地域づくりの取り組みにインパクトを与えるものである。

研究成果の概要（英文）：This research investigates how inhabitants have continued the local festivals and folk performing arts from generation to generation. To take over them, residents need supports from out-migrants, incomers, and volunteers. In the process of taking over the indigenous customs, participants re-construct the festivals and performances. This research analyses the transition and make clear the function of cooperation between inhabitants and other stakeholders in overaged and depopulated communities. Moreover, it aims to show the possibility of local festivals and folk performing arts to empower the community because they play the role of mediation among diverse collaborators. This research project focuses on conflicts and misunderstanding between residents and other stakeholders. The project conducts the participant observation and interview for participants in three festivals in farm, mountain and fishing village because industrial and job structure gives effect to the organizational one.

研究分野：社会学

キーワード：祭礼　民俗芸能　地方都市　限界集落　移住者　他出子（他出者）

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで、近現代日本において地域社会がナショナルな共同性に組み込まれて（と同時に逆にナショナルな枠組みの一部へと、地域社会の側が参入して）いく中で、地域社会の祭礼を研究対象としつつ、地域的なアイデンティティが再構築・再編成されていくプロセスについて、 また戦後日本における祭礼が観光化や地域振興といった文脈でどのように再編され、またその背景にある地域社会の構造の変容について(歴史)社会学の観点から研究を行ってきた。

具体的には、まず大正末以降に全国で広まった、民謡や新民謡と呼ばれるご当地ソング、民俗芸能による地域おこしや観光宣伝を通じて、地方自治体・観光関連産業・地方新聞社・各地の放送局・レコード会社といったエージェントが絡み合いつつ、地域アイデンティティが再編されていくプロセス、またメディアを通して全国に向けて特定の地域をアピールする場を通じて、人々が自らの地域をナショナルな空間の一部として改めて位置づける中で、地域社会における芸能の意味づけがどう変容したかについて、戦前期を中心に明らかにしてきた。

戦後については、滋賀県長浜市の都市祭礼である長浜曳山祭や、農村部の盆踊りである江州音頭の歴史的変容や現状についての調査・分析を行う中で、戦前から戦後にかけて祭の担い手たちが観光や地域活性化、また文化財指定といった社会的文脈を踏まえてどのように祭礼を再編成しつつ継承していったかについて、一部では申請者自身が祭礼の担い手として新規参加しつつ研究を行ってきた。また柳田國男の民謡論や口頭伝承論等をメディア論の観点から読み直すことを通じて、その分析視点を理論的に深化させる研究 を行ってきた。加えてメディアにおける農村の祭礼・芸能の表象とその構築プロセス、そうした表象が再帰的に担い手に与えた影響について、NHK のラジオ・テレビの農事番組を分析対象とした研究も行っている。

２．研究の目的

今回の研究課題はこうした申請者自身の研究を踏まえて、現代日本社会における「伝統的」とされる祭礼とその担い手集団について、戦後における地域の階層構造の変化や近年の人口減少を背景としつつ、それまでなかった他出者や女子の祭礼・芸能への参加、外部からの新規参入、観光客誘致、文化財行政やユネスコ無形文化遺産指定といった社会的な価値づけ、経済的な地域活性化への期待といった祭りをめぐる社会構造の変化と、祭礼への外部からの視線に対する担い手側の祭り自体への再帰的な意識の高まりにおいて、いかに祭礼とその担い手集団が再編成されていくのか、また背景にある地域社会の構造変容について明らかにする点にある。

その際の重要な手がかりとして、地域社会における担い手集団、また地域出身者の同郷者集団、 また担い手に対して影響を及ぼす諸エージェント（文化財行政・観光産業・地方新聞社や放送局といったメディア・研究者・商工会や青年会議所・研究者など）とが取り結ぶ関係性の分析を中心とする。研究対象となる時期は高度成長期以降、特に 90 年代以降において観光化や文化財としてのバックアップを得て各地で祭礼・芸能を用いた地域活性化の動きが見られる現在までとなる。本研究の従来の研究に対する特色・独自性は以下のとおりである。

1.戦前・戦後における状況と現在と比較した歴史的視点

こうした祭礼・芸能をめぐる近年の社会学・民俗学・文化人類学の研究は、国家や市町村の民俗行政や観光客誘致といった社会的文脈の中で、芸能と従来その担い手となってきたエージェントに及ぼす影響と，それにともなう芸能の担い手の対応や変容について、観光客の視点を介在して（再）創造された「創られた伝統」として、太田好信らが論じた「文化の客体化」の観点から着目し、論じてきた。特に 1992 年に制定された「おまつり法」の地域社会への影響という観点から、90 年代以降の地域の伝統芸能の観光資源化の研究が行われている。

しかしながら、そうした諸研究においてはいずれも，こうした地域伝統芸能を通じた地域おこしや観光といった現象を、90 年代以降的な現象としてのみ把握するか、せいぜい 70 年代の「ディスカバー・ジャパン」的な状況の反復としてしか捉えていない。だが既に戦前期から，観光産業や地域振興、それに関わる諸エージェントの関係性を通じて類似の状況は存在し、その度ごとに芸能も地域社会も変容してきた。現代の後期資本主義状況での地域おこしや観光の文脈での「伝統」の掘り起こしという状況が持つ特質は、戦前や 1970 年代から見られた類似の現象と比較することで初めて、十分に理解することができる。本研究は既に申請者自身が研究を行った戦前・戦後における類似の現象との比較という歴史的射程の中で、戦後そして現在における祭礼･芸能とそれをめぐる言説の変容､芸能をとりまくエージェントの関係性の違い、そしてその背景にある地域社会の構造的な変化について問い直そうとしたものである。

2. 他出者による出身村の祭礼・芸能への関わりとそれにともなう変容

農山漁村や地方都市から他所へ移住した他出者が地域の祭礼・芸能にどのように関わっていくかは、地域社会におけるそれらの継承において非常に重要な意味を持つ。実際、少子高齢化の進行の中で、他出者に対して継承をめぐる重要な役割が期待されており、また現実にその関わりは不可欠なものとなっている。しかし従来の祭礼・芸能研究では、地縁・血縁とは異なる選択縁に基づく外部からの新規参加者の存在に注目する一方で、そうした外部からの参加者以上にむしろ地域社会で期待されている、そうした他出者の参加やそれが果たす役割、またその参加を可能にすることを前提とした祭礼の構造の変容について論じた研究は極めて少ない。

これは祭礼・芸能に関する研究に限らず、農村社会学等の分野においても、徳野貞雄らの限界集落論の文脈において、全くの外部からの参加者の限界と他出者の重要性が指摘されているにもかかわらず、他出者を扱った研究は農作業の手伝いや福祉的なサポートといった点には注目しているものの、祭礼・芸能に関して、さらにそうした関わりを可能にする要因やそこでの他出者にとっての意味まで踏み込んだものは極めて稀である。本研究は少子化が進行する地方都市、農村、漁村それぞれについて、上記の十分に研究が進められていない点について明らかにした。その上で従来の研究が前提としてきた担い手、そして観光客や外部からの参加者といった二者関係だけにとどまらず、他出者が祭礼や芸能にどのように関わり、またその三者がどのような関係性を築いているのかを分析したのが、本研究の新たな重要な貢献である。

3. 祭礼・芸能の意味づけの競合と、居住する担い手・他出者・外部からの参加者の関係性

従来の祭礼・芸能をめぐる社会学的研究は、当該の地域や集落に居住する担い手と観光客や外部からの新規参加者との関係性、観光化に基づく変容やそれに抗する維持、またそうした状況における「文化の客体化」について論じてきた。しかしそうした研究の多くは、観光客と担い手との間の共犯関係を前提として、特定の地域文化の担い手やそれについての意味づけを、過度に一枚岩化してしまっている。同じ地域にある同じ名前の芸能であっても、実際には複数のバージョンが並立して存在しており、それぞれのバージョンの違いに応じて異なる地域アイデンティティや歴史意識が重層している。そうした複数の客体化がせめぎあい、また時に併存していくという状況を視野に入れて研究を行った。その際に 2 で述べた、居住する担い手・他出者・外部からの参加者や観光客にとっての祭礼や芸能の意味づけ、ズレを明らかにした。

３．研究の方法

本研究の観点からは、祭礼・芸能を行う当該地域住民だけでなく新規参加者、さらにその地域出身の人々、同郷団体等に対するアプローチがしやすいことが望ましい。またそれらの関係性の特質や、他出者・外部からの参加者の関わりやすさも地理的特性、都市部か農山漁村か、生業・ 宗教組織・祭礼組織などによって異なってくると考えられる。そうした観点から、本研究では地方都市・農山村・漁村(離島)という条件の異なる三ヶ所について、研究を行った。

①地方都市：滋賀県長浜市の都市祭礼、長浜曳山祭を中心に研究を行う。これは長浜市中心市街地における 12 の地縁組織(山組)が、曳山の上で子ども歌舞伎を奉納するものである。この地域は第三セクター「黒壁」による観光化による地域の経済的な活性化の一方で居住人口が大きく減少しており、郊外や近隣都市に居住する元住民や新規参加者が山組の若衆に加わって祭礼が執行されている。申請者自身も平成 24 年より山組の若衆として祭礼の執行に携わりつつ研究を行っている。こうした立場を生かして、山組の地域に居住する祭礼の担い手と、外部に 居住しつつ祭礼に関わる他出者、また新規参加者の祭礼への参加や相互関係に関する参与観察調査、および三者へのインタビュー調査を行った。長浜曳山祭は平成 28 年秋にユネスコ無形文化遺産登録に向けての準備が進行しており、それにともなう観光客誘致や今後の継承に向けた検討が進められつつある。また長浜曳山文化協会(長浜市曳山博物館)や各山組が蒐集している史資料を活用しつつ申請者自身の研究(研究業績 311)を発展させる形で、戦後における祭礼や山組の歴史的 な変遷や再編成の分析を行った。

②農村：滋賀県竜王町の苗村神社三十三年式年大祭を対象として研究を行った。苗村神社三十三年式年大祭は三十三年に一度、苗村神社の氏子である三十三の集落が神社および御旅所への渡御を行い、また集落ごとに山車や様々な芸能を奉納するものであり、平成 26 年 10 月に行われた。この祭礼・芸能については、竜王町教育委員会・苗村神社式年大祭実行委員会より依頼を受け、中心的な役割を果たす 9 つの集落(「九村」と称される)について、申請者を含む滋賀県立大学の調査チームが山車・芸能の準備から祭礼当日の状況に関するインタビュー及び参与観察調査を行っていたが、その内容を踏まえつつ追加調査を行った。ただし山車・芸態の記録による 33 年後への継承を目的とするこの報告書とは異なり、本研究では各集落の祭祀組織、また過疎化・高齢化が進行する中で今回の大祭を可能にする上で不可欠な役割を果たした他出者に着目し、両者の相互関係と祭礼・芸能に関する意味づけについて分析を行った。さらにまだ他出者の参加が必要ない状態で行われた、昭和 57(1982)年の前回の大祭、さらに昭和 25（1950）年・大正 7（1918）年に行われた大祭に関する歴史社会学的な調査を実施し、その間の祭礼・芸能、また担い手集団および背景にある地域社会の変容についての分析を行った。

③漁村（離島）：山口県上関町に位置する離島である祝島において 4 年に 1 度、8 月中旬に執行される祝島神舞を対象として研究を行った。この祭は祝島の人々が、大分県国東市にある伊美八幡別宮社から神職と里楽師の一団を迎え、島内に設けられた仮神殿および宮戸神社境内にある大歳社において神楽が奉納される。神事・神楽を除く準備の一切、例えば祭礼を行う仮神殿の建設や奉納のための諸準備は祝島住民が担う。1980 年代にこの祭は中国電力の上関原発建設をめぐる地域対立から 2 回中止されたが、平成 4（1992）年に島内の大多数を占める原発反対派の手で再開された。

申請者は平成 24（2012）年の祭においては 8 月初旬より準備を手伝いつつ参与観察を行った。島は過疎化・高齢化が進行して人口 500 人を大きく割り込む中、前回は 40 人以上の島出身の他出者が参加するほか、島外からの移住者約 30 名も含めた形で祭の準備が行われた。祝島を舞台とするドキュメンタリー映画の影響もあり、祭が行われた 5 日間は島外からの観光客も数

多く訪れている。このように島民だけでなく他出者、また新規参加者や観光客が数多く見られる点で、それら三者の関係性やそれぞれにとっての祭の意味について分析するに適しているため、平成 28（2016)年の祭礼において、参与観察とインタビュー調査を行い、さらに祭を執行する「祝島神舞奉賛会」が所蔵する史資料に基づく分析や、祝島出身の他出者と祝島に関心を持つ島外者のグループで、申請者自身もメンバーの一員である「祝島ネット 21」の会員である他出者へのインタビューを通じて、他出者の祭への参加やその意味について分析を行った。

４．研究成果

（1）長浜曳山祭に関する研究成果

長浜曳山祭に関する研究成果は著書『コモンズとしての都市祭礼：長浜曳山祭の都市社会学』（新曜社、2019 年）として全体をまとめて刊行したため、その内容を記述する。この著作では、近世以来の歴史をめぐる地方都市（伝統消費型都市）、特にその都市を構成する名望家層である商工業者たちの「家」を中心に構成された「町内」の社会構造と社会的ネットワークについて明らかにした。そのことを通じて伝統消費型都市の社会構造とそこに生きる人びとの社会意識を明らかにし、また従来の都市社会学において十分に展開されてこなかった地方都市の分析枠組みを提示した。

本書は、近世以来の歴史をめぐる地方都市（伝統消費型都市）、特に「町内」と呼ばれる伝統的な名望家層で構成された地域社会の社会構造と社会的ネットワークについて明らかにし、それによって従来の都市社会学で展開されてこなかった地方都市の分析枠組みを提示した。第 4 章「町内における家と世代：祭礼をめぐるコンフリクトとダイナミズム」では、「町内」における金銭や人的資源の拠出とそれに対する名誉・威信の配分、それにともなうコンフリクトから「町内」の内部構造を分析した。第 5 章「山組間における対抗関係の管理と見物人の作用：裸参りを手がかりとして」では、興趣という資源の創出・配分メカニズムを通じて、見物人を巻き込みつつ創り上げられる町内間の関係を分析した。第 6 章「シャギリをめぐる山組間の協力と山組組織の再編」では、囃子という技能に焦点を当て、「町内」間の協力関係と「町内」における人材育成の仕組みの変容を論じた。第 7 章「若衆たちの資金獲得と社会的ネットワークの活用」では、祭礼の資金調達を通じて、「町内」の社会的ネットワークを分析した。第 8 章「曳山をめぐる共同性と公共性：コモンズとしての曳山の管理とその変容」では、山車の管理の仕組みを通じて「町内」と地域経済団体や行政との社会関係について分析した。第 9 章「観光・市民の祭り・文化財：祭礼の継承における公共的な文脈の活用と意味づけの再編成」では、祭礼を通じた「町内」と行政や観光協会の関係性の変容について分析した。第 10 章「本論文における知見の整理と結論」では 3 点にわたり本論文の意義を示した。①都市社会学に対し、聚落的家連合による全体的相互給付関係としての「町内」の分析の有効性を示した。②非日常の場にとどまってきた祭礼研究に対し、祭礼という非日常の場を日常と具体的に結びつけて分析した。③共同性を自己完結的にとらえてきたコモンズ論に対し、共同性と公共性の交差・重層、またその更新・変容のダイナミズムを分析した。

参考文献

①武田俊輔,2019,『コモンズとしての都市祭礼：長浜曳山祭の都市社会学』新曜社.

（2）竜王町苗村神社三十三年式年大祭に関する研究成果

人口減少が著しく進行した九村と呼ばれる宮座組織において、33 年前と比較してどのように祭りやそこで奉納される芸能のあり方が変容したのか、祭りへの他出者の関与といった点について論じた。その変容のあり方は個々の宮座ごとによって異なるが、例えばある宮座では子供の数が 33 年の間に半数以下となったことでの試行錯誤が指導者によって行われ、踊り子の動きもほぼ一新された。稽古中も含めて常に踊りのあり方は上書きされ続け、三十三年分の時時代の変化が一度の大祭で押し寄せるという状況を見出すことができた。

また子どもの減少で参加者の年齢構成を大きく変更し、小中学生から前回経験した大人へとスライドするパターンや、逆に前回は 30 歳以上の大人が順に役を与えられていた踊りについて、子ども会を介して小学生が担うようになったパターンも見られた。さらに前回と同年代の男子がいなかったため、女子 2 名を稚児として大きく振付が変更された事例もある。また宮座を問わず、人数の多い踊りについては、他出者の子どもの参加が数多く見られた。さらに式年大祭の最終日に行われた稚児行列は各宮座にあたる集落の子どもたちはそれぞれの宮座での催しがあるために一切参加せず、集落外に住む外孫や親戚の小学生以下の子ども 260 名が参加した。

三十三年に一度という極めて特殊な継承のあり方ゆえに、背景となる社会変動が極めて大きく、それによって担い手の人数、また他出者やその子ども世代を含み込んだ形での広範なネットワークの中で祭礼が継承され、また「伝統」が稽古のプロセスなどを通していかにダイナミズムをもって変容し、創造されるかについて具体的に明らかにすることができた。

参考文献

①滋賀県立大学人間文化学部式年大祭調査団,2015,『苗村神社三十三年式年大祭調査報告書』竜王町教育委員会.
②武田俊輔編・滋賀県立大学式年大祭調査団,2016,『世代をつなぐ竜王の祭：苗村神社三十三

年式年大祭』サンライズ出版.

（3）山口県上関町祝島の祝島神舞

祝島については 4 年に 1 度行われる神舞について、2016 年とそれ以前とを比較することで分析を行った。グローバライゼーションによる労働の流動化・個人化、そして東日本大震災と原発事故がきっかけとなった都市的なライフスタイルの見直しのなかで、農山漁村への移住希望者が増加していることはよく知られている。祝島の住民は 1982 年に浮上した中国電力による原子力発電所建設計画に反対し続けており、東日本大震災以降、その島の住民の理念や活動、ライフスタイルに共感した移住者が人口の 1 割弱（約 30 名）を占めている。

2012 年から既に移住は行われるようになっていたが、当時との最も大きな違いは移住者が祭礼において極めて重要な立場を占めるようになった点にある。例えば舞い手は、初めて島内に血縁を持たない移住者から選ばれた。また準備段階でも意図的に移住者たちに重要な役割を任せて、その上で補助、指導をできるようにしていた。

そうしたプロセスは以下の機能を持つ。①それぞれの移住者の性格や技術を見極めると共に、今後の祝島での生活共同においてどのような役割を果たしてもらうかについて住民側が見抜き、島内において生業を身につけさせるための指導の足がかりとなっている。②また逆に移住者側が島の中で自らの特技を発揮し、島の中でどのような存在価値を示すことができるかを示す場としても機能している。③さらにこうした共同作業を通して生みだされた関係性は、その後になって移住者が互恵的な島の共同性に参入する上で重要な機会となっている。

島内では現金収入は極めて少ないにもかかわらず生活が成り立つのは、それぞれが自給自足的に一定の農地を所有して耕作しているほか、漁師の場合は漁、そしてヤマやウミからのマイナーサブシステンスの採取が行われ、それらが頻繁にイエ同士の間で相互に交換されることを通じてである。そうした関係性に参入するためには、島内において①②がある程度明確になり、島の中での貴重な働き手としての役割が見出されることによってである。

さらに本研究では移住プロセスや定住プロセスの連関、移住者がどのようにして村落に移住することになったのか、移住先でどのようにして生計を立て、コミュニティの一員として認められているのか、さらに移住前に培っていた人間関係や社会的ネットワークが移住後にどのように活用されているのかについて明らかにした。そのことによって、現代の農山漁村において移住者が生活して生計を立てていく上では、伝統的な地域社会の社会関係への埋め込みと同時に、個人化・流動化した現代社会における社会的ネットワークを保持し続けて活用することが不可欠であること、またそうした社会的ネットワークがあるからこそ、伝統的な村落のライフスタイルを維持していくことができる。社会関係の個人化・流動化が個人化・流動化が、伝統的なコミュニティを破壊するということでは必ずしもなく、むしろ逆に伝統的なコミュニティの存続・継承を可能にする可能性を見ることができた。

参考文献

①Takeda, Shunsuke (forthcoming), The role of lifestyle migration for the continuation of village traditions , in Wolfram Manzenreiter, Ralph Lu¨tzeler and Sebastian Polak-Rottmann(eds), *Japan’s New Ruralities: Coping with Decline in the Periphery*, Routledge.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　6 件）

①武田俊輔,2015,「都市祭礼におけるコンフリクトと高揚　長浜曳山祭における山組組織を事例として」『生活学論叢』(28):17-30,日本生活学会（査読あり）

②武田俊輔,2016,「都市祭礼における社会関係資本の活用と顕示　長浜曳山祭における若衆たちの資金調達プロセスを手がかりとして」『フォーラム現代社会学』(15): 18-31,関西社会学会（査読あり）

③武田俊輔,2016,「都市祭礼における周縁的な役割の組織化と祭礼集団の再編　長浜曳山祭におけるシャギリ（囃子）の位置づけとその変容を手がかりとして」『年報社会学論集』(29):80-91,関東社会学会（査読あり）

④武田俊輔,2017,「再解釈される『伝統』と都市祭礼のダイナミクス：長浜曳山祭における若衆-中老間のコンフリクトを手がかりとして」『東海社会学会年報』(9):81-92,東海社会学会（査読あり）

⑤武田俊輔,2017, 「コモンズとしての山・鉾・屋台をめぐる社会関係：長浜曳山祭における曳山の管理とその変容を手がかりとして」『民俗芸能研究』(63) 75-100,民俗芸能学会（招待あり）

⑥武田俊輔,2017,「都市祭礼における対抗関係と見物人の作用：長浜曳山祭における「裸参り」行事を手がかりとして」『社会学評論』68(2):265-282,日本社会学会（査読あり）

〔学会発表〕（計　9 件）

①武田俊輔「長浜曳山祭における若衆組織の継承とキャリアパス」第 42 回日本生活学会研究発表大会、武庫川女子大学（2015 年 5 月）

②武田俊輔「都市祭礼における『町内』意識をめぐる排除と包摂：長浜曳山祭における担い手

の新規参入のネットワークとキャリアパスを手がかりに」第 33 回日本都市社会学会、静岡県立大学（2015 年 9 月）
③武田俊輔「都市祭礼における「町内」意識の変容と現在：長浜曳山祭における子ども歌舞伎役者の決定プロセスを手がかりとして」第 88 回日本社会学会、早稲田大学（2015 年 9 月）
④武田俊輔「『裸参り』考：都市祭礼における対抗関係の生成とオーディエンスの役割」第 64 回関東社会学会、上智大学（2016 年 6 月）
⑤武田俊輔「都市祭礼における競合関係と観客の作用：長浜曳山祭の子ども歌舞伎（狂言）へのまなざしをてがかりに」第 89 回日本社会学会、九州大学（2016 年 10 月）
⑥武田俊輔「コモンズとしての都市祭礼：『曳山』とその管理システムを手がかりに」第 65 回関東社会学会、日本大学（2017 年 6 月）
⑦武田俊輔「祭礼の危機と担いのしくみ(5)都市祭礼における山車の管理システムの再編をめぐって」第 90 回日本社会学会、東京大学（2017 年 11 月）
⑧Shunsuke Takeda,Succession and Reconstruction of Festivals/Folk Performing Arts in Overaged and Depopulated Communities: Focusing on the Role of Mediator between Inhabitants, out-Migrants, Incomers, and Volunteers, International Sociological Association, The XIX World Congress of Sociology（第 19 回世界社会学会議、2018 年 7 月）, Toronto Convention Center
⑨武田俊輔「個人化した社会運動ネットワークが支える伝統的集落生活：山口県上関町祝島におけるライフスタイル移住者たちを事例として」第 67 回関東社会学会、早稲田大学（2019 年 6 月）

〔図書〕（計　6 件）
①武田俊輔,2015,「都市祭礼の継承戦略をめぐる歴史社会学的研究：長浜曳山祭における社会的文脈の活用と意味づけの再編成」野上元・小林多寿子編『歴史と向きあう社会学：資料・表象・経験』ミネルヴァ書房:129-151.
②滋賀県立大学人間文化学部式年大祭調査団,2015,『苗村神社三十三年式年大祭調査報告書』竜王町教育委員会.
③武田俊輔編・滋賀県立大学式年大祭調査団,2016,『世代をつなぐ竜王の祭：苗村神社三十三年式年大祭』サンライズ出版.
④市川秀之・武田俊輔編,2017,『長浜曳山祭の過去と現在：祭礼と芸能継承のダイナミズム』おうみ学術出版会.
⑤武田俊輔,2019,『コモンズとしての都市祭礼：長浜曳山祭の都市社会学』新曜社.
⑥Takeda, Shunsuke (forthcoming), The role of lifestyle migration for the continuation of village traditions , in Manzenreiter,M., Lu¨tzeler,R., and Polak-Rottmann, S.,(eds), *Japan’s New Ruralities: Coping with Decline in the Periphery*, Routledge.

６．研究組織
(1)研究分担者　なし
(2)研究協力者　なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。